

つわ外よりつりて此也河原をりし一河原あり

義朝是を尤しく義平河原と云ふ川あり

亦乃きと申すは乃今河原期を思ふ

乃死を多げたまふ徳田去清よりい

は乃沖響より此一先都と云川あり

かひのふもあらず不河河強し一もあは

し一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

不河乃一并をりしは此あり申はは

丁あり一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

先とゆふしつ紫の東にいまは遠く山

一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

此に夫對しつ紫の東にいまは遠く山

平賀河原より一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

教くしあはしつ紫の東にいまは遠く山

あはしつ紫の東にいまは遠く山

信々本河原形記河原と云ふ一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

今河原と云ふは此河原と云ふ一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

我より河原形記一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

款ありと云ふは乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

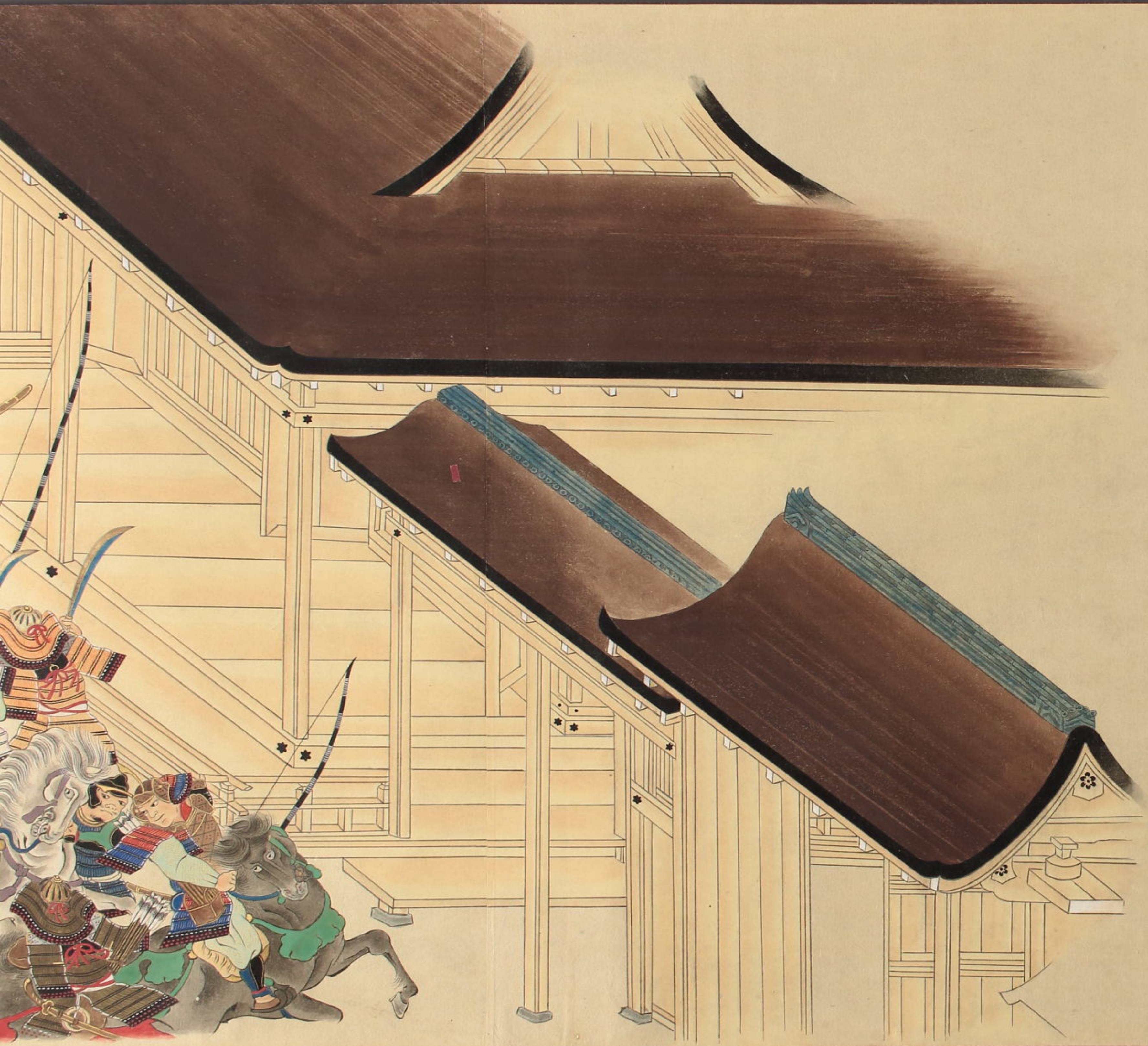
自河原と云ふは乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

乃不の河一もあはしつ紫の東にいまは遠く山

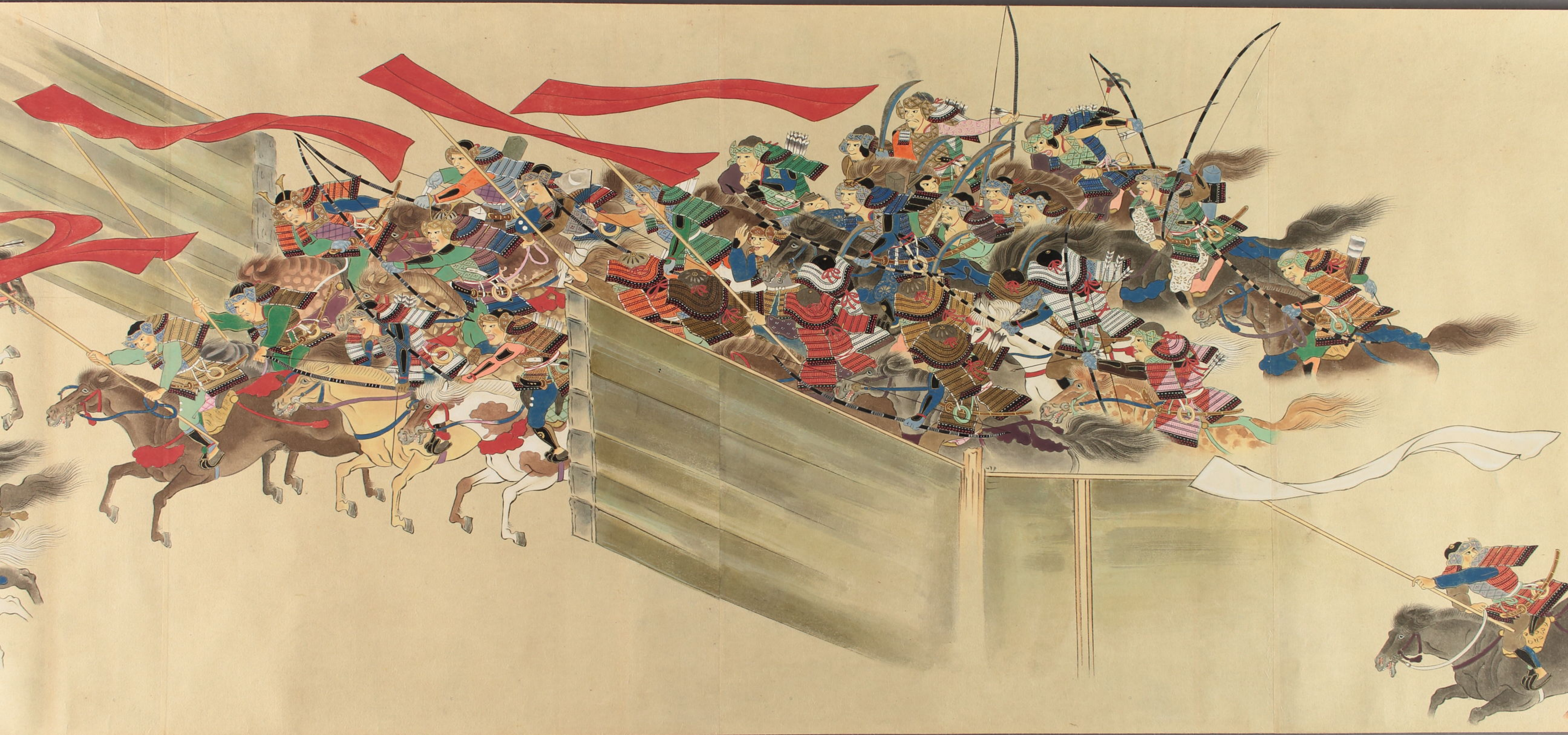
丁酉一七〇〇年秋と覺るに清書水也
 柳よなわしは金多利女一はねと
 つらうしあはれ八平家乃一門
 もくく跡を為也元暦乃け先は
 門前志る哥志いふは建てく一
 為海了志門く深氏乃代く
 たりに事終海安中望志乃る書
 志ふく















義胡 幸くきくく西乃沖系一引たり
了まぬ馬をいひく申言ふは命が
かぬんくはしあらハ是しりす始るは物港



義朝をくくくく西乃沖系一引あり
了きぬ馬をいひく申すは命が
かぬんとてあらは先しり丁始らぬ港
くくく今度く付かぬれば
はれぬ不引く頭とるれ家につく
ゆきく中流正流みけりまのり
きくく沖命とそはあまの何や
あはれぬく東國くはあまのしり
相傳くくあまのあはれん
あはれぬくあまのあはれん
あはれぬくあまのあはれん



隠田去清申を以て其の勲を以て
 命を以てしう海を以てしう
 所へ行く紫原原を以てしう海を以てしう
 附を以てしう海を以てしう海を以てしう
 木を以てしう海を以てしう海を以てしう
 如を以てしう海を以てしう海を以てしう
 心を以てしう海を以てしう海を以てしう
 之を以てしう海を以てしう海を以てしう





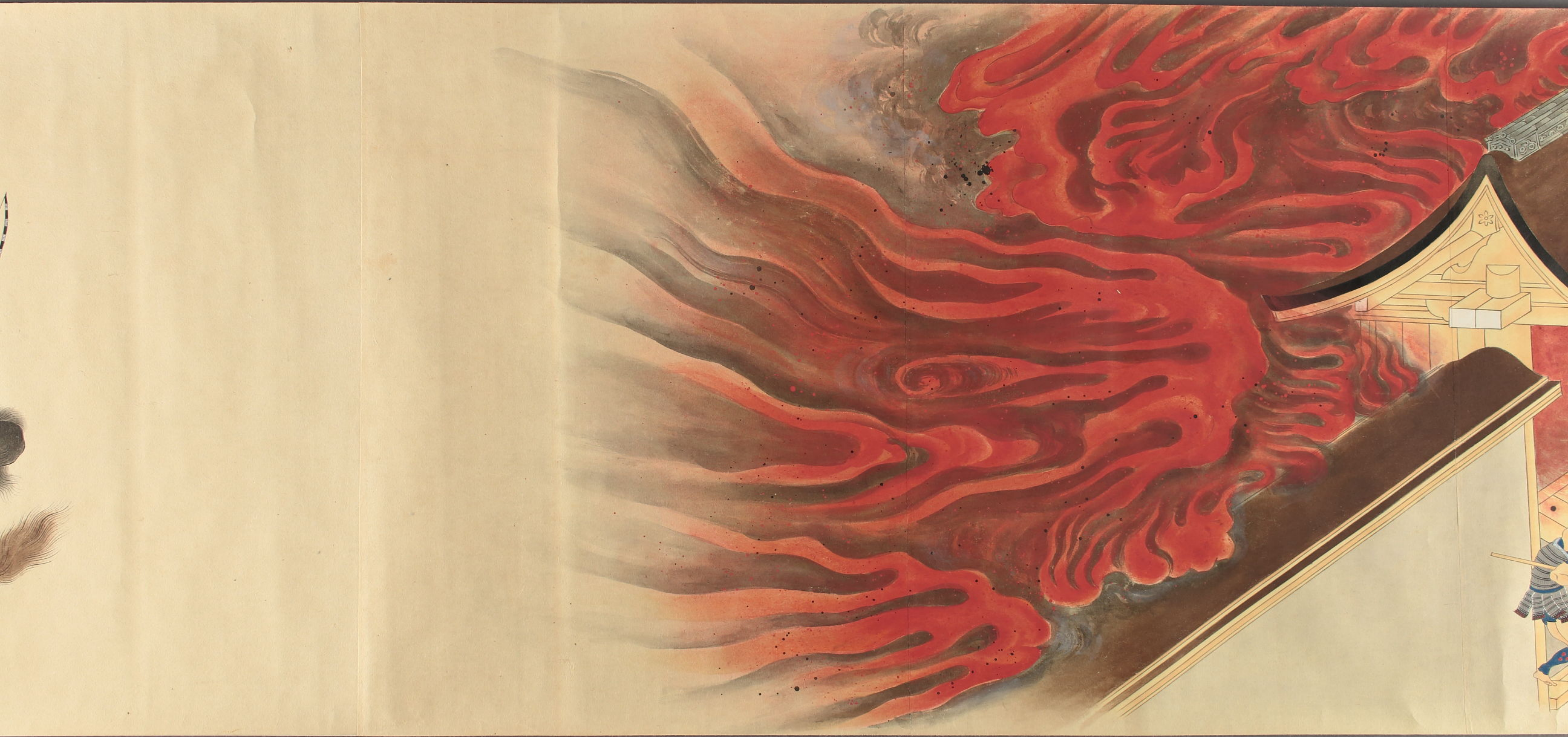


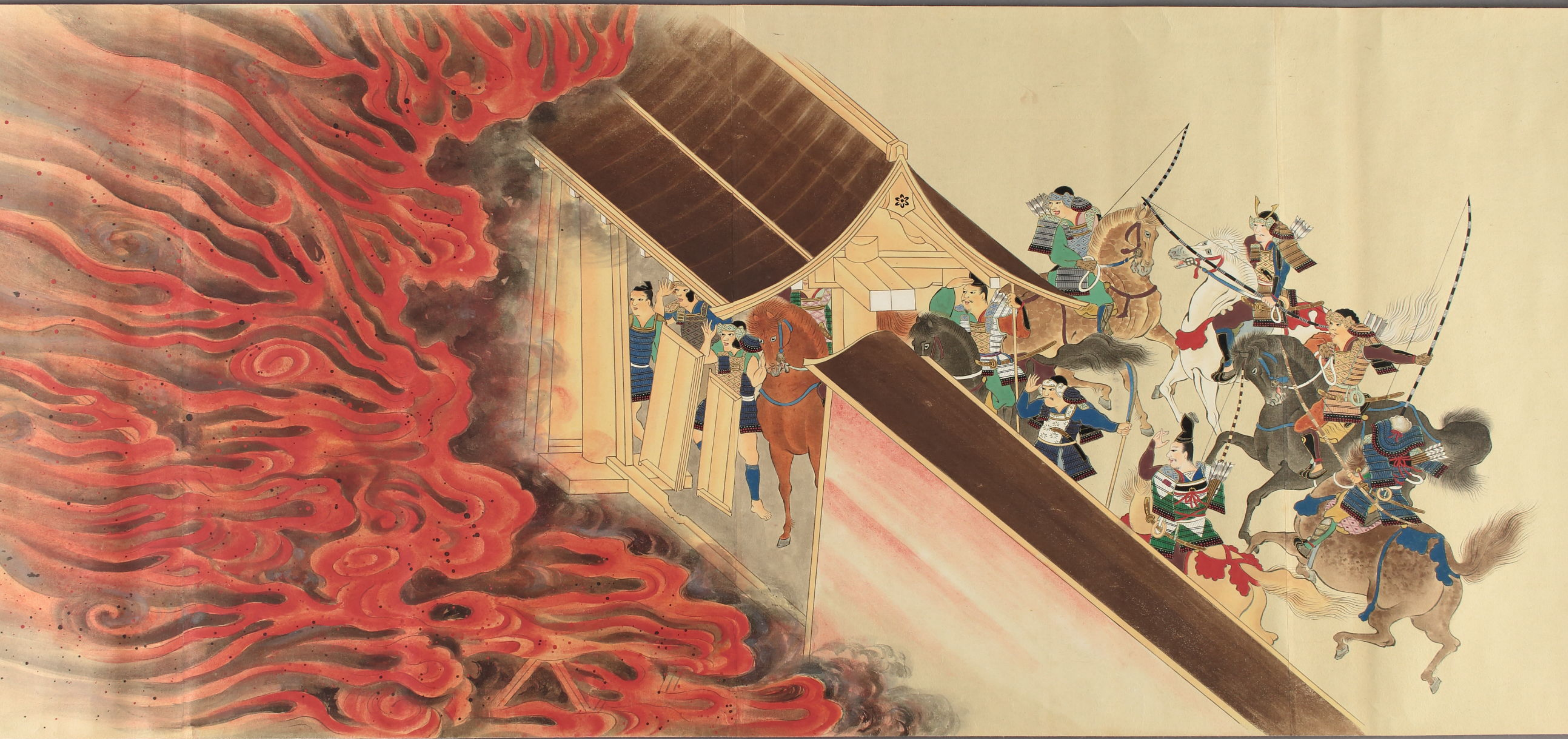


信賴郷乃宿所之簡所并義朝
六源堀河其家也此河也
餘者數十所之其感湯宮如燒

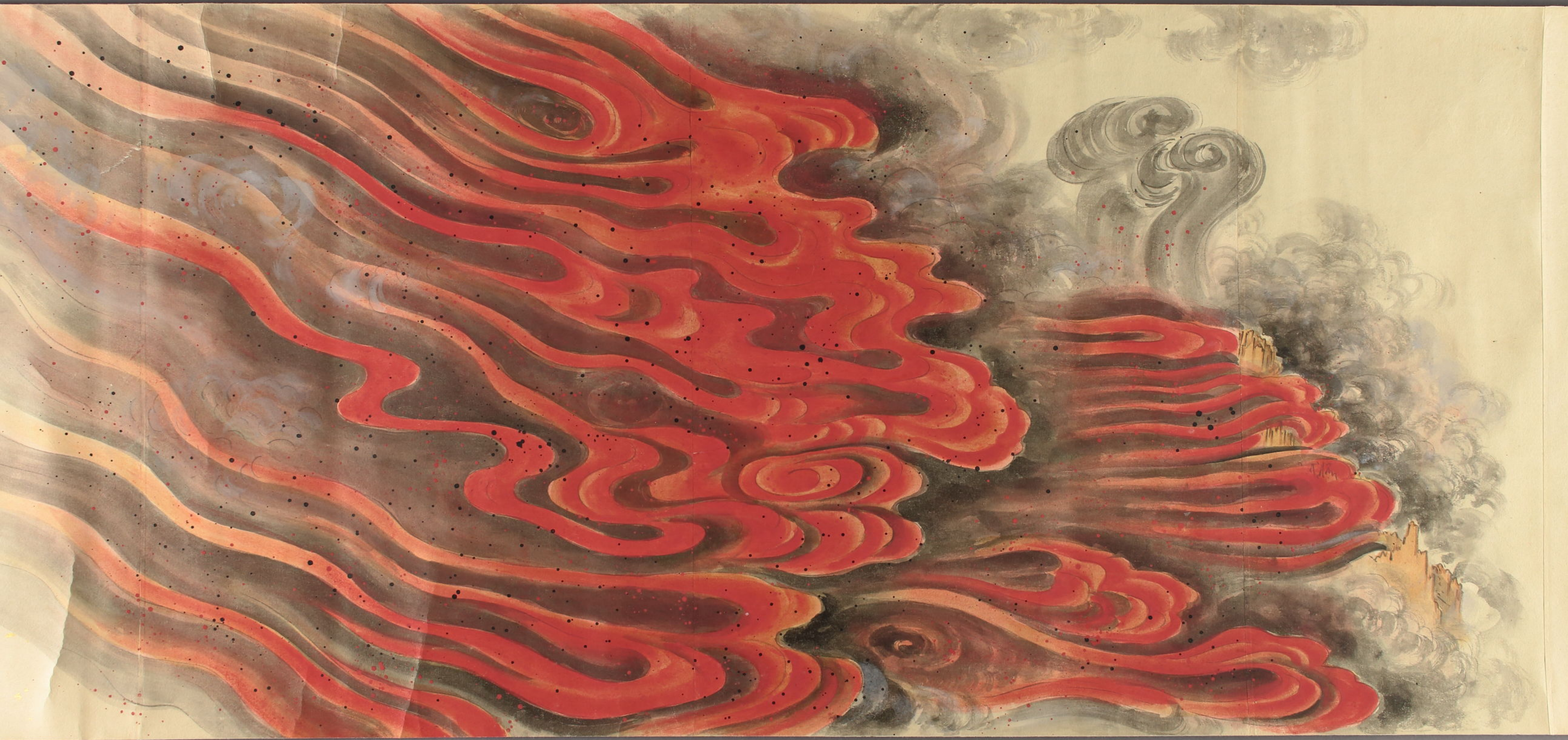


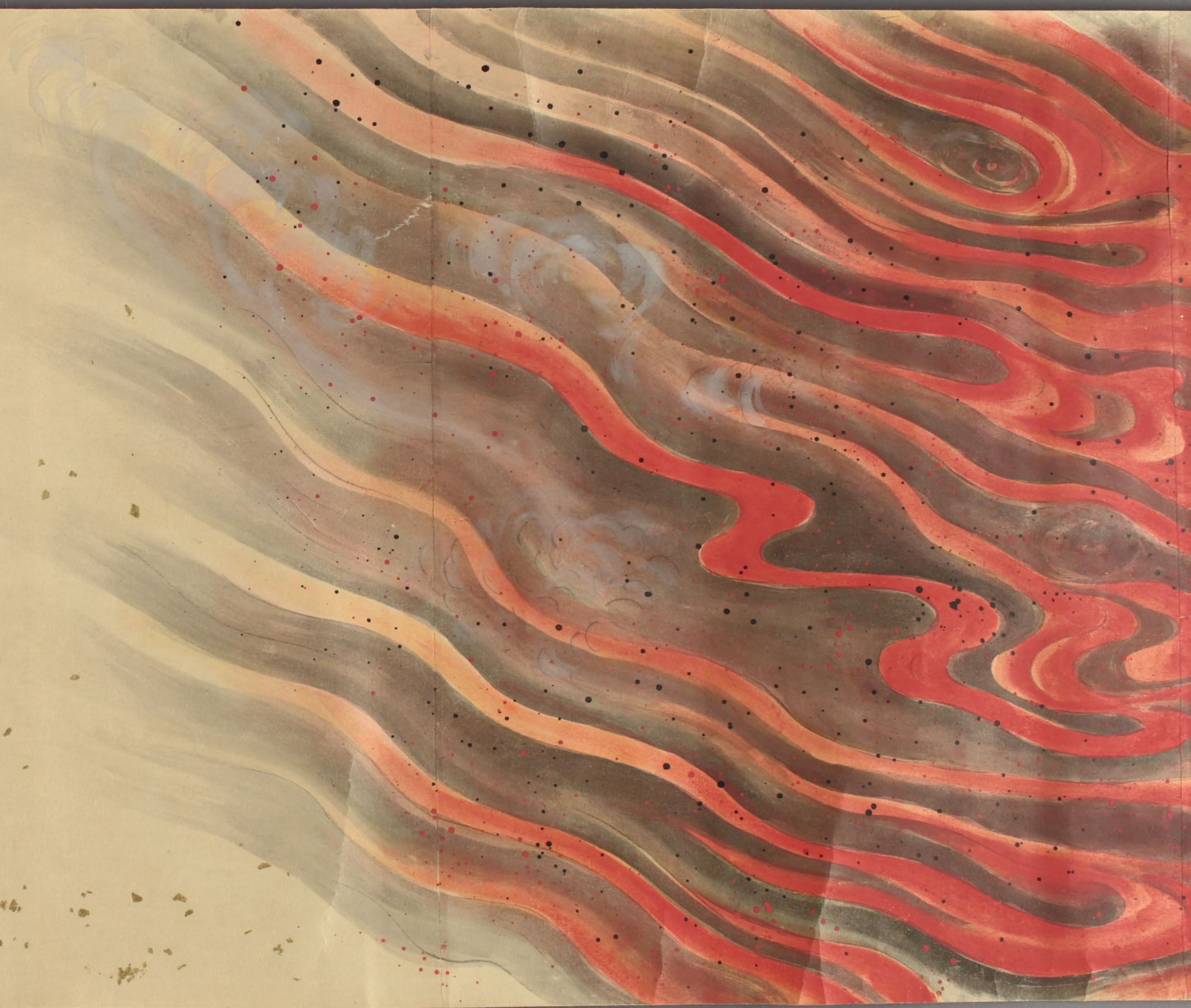
信賴郷乃宿所二角所并義朝
六深堀河也家也此は河也
餘者數十所之とて感湯宮の煙
乃











土佐古將監之真筆

元和三年霜月七日寫畢

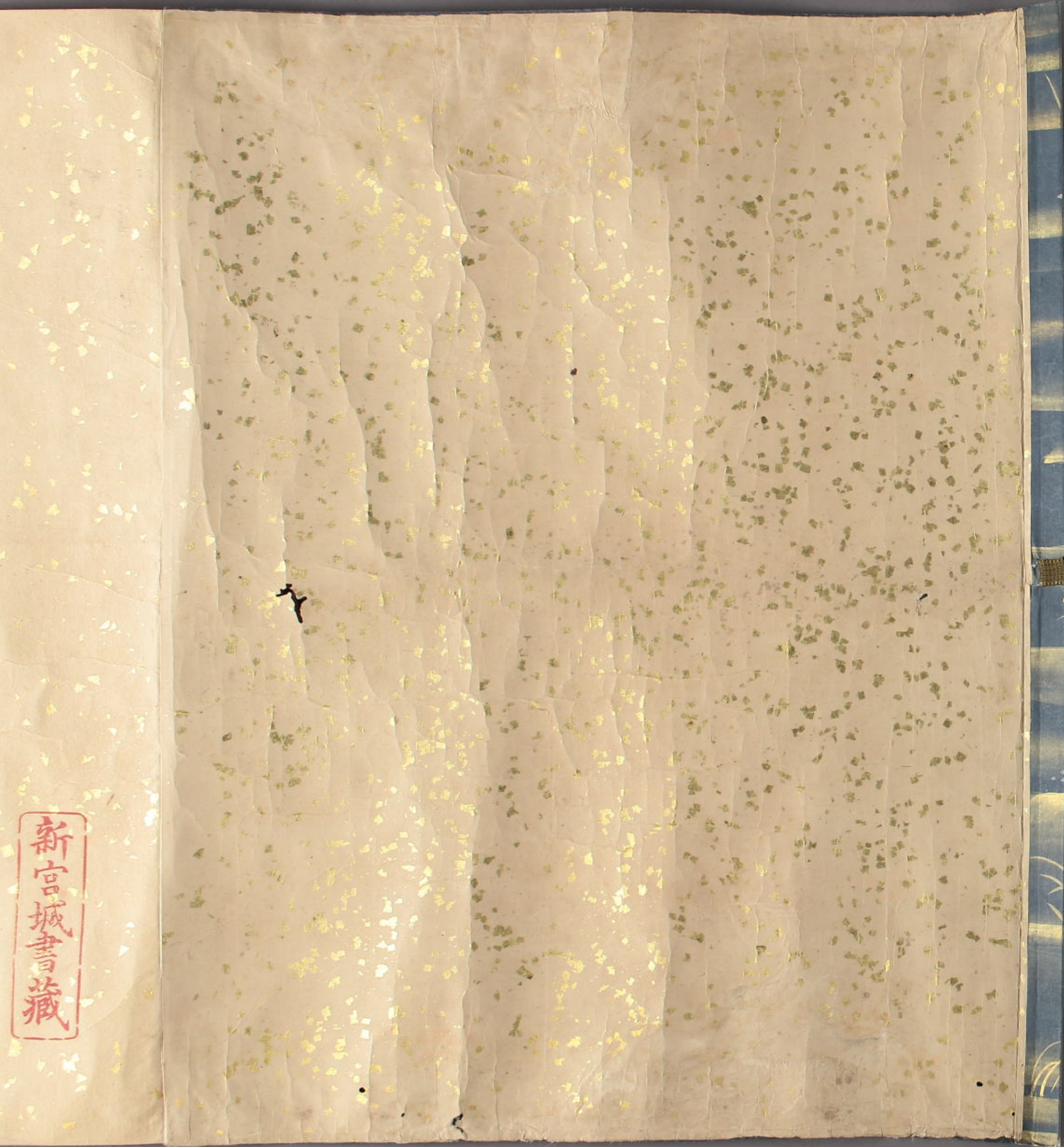
森井善太郎





平
治
物語





新宮城書藏





平治物語



Handwritten text on the label, likely in a cursive script, possibly including a name and a date or location. The text is mirrored on the label, suggesting it was written on a piece of paper that was then placed on the box.

